# 伊東市史だより

第9号

平成20年３月31日

【特集】

## 写真でたどる戦前・戦後の伊東

**はじめに**　平成年号も二十年が経過して、「昭和」は懐かしまれる時代となりました。

市史編さん室では伊東に関係する様々な史料を市民の皆様に提供いただいて保管しています。ここでは、集まった写真の一部を使って宇佐美と伊東の戦前・戦後の姿を紹介します。写真の中には、懐かしいあなたの家や親戚の方などが写っているかもしれませんが、そうした詳細な情報が欠けている場合もあります。このたよりをご覧になって、懐かしい思いでをお寄せいただくと伊東市民の歴史の復元に役立ちます。

写真１　伊東駅前で客を出迎える旅館の番頭さんたち
（昭和25年頃ＧＨＱ付カメラマン　ディミトリー・ボーリア撮影マッカーサー記念館提供）

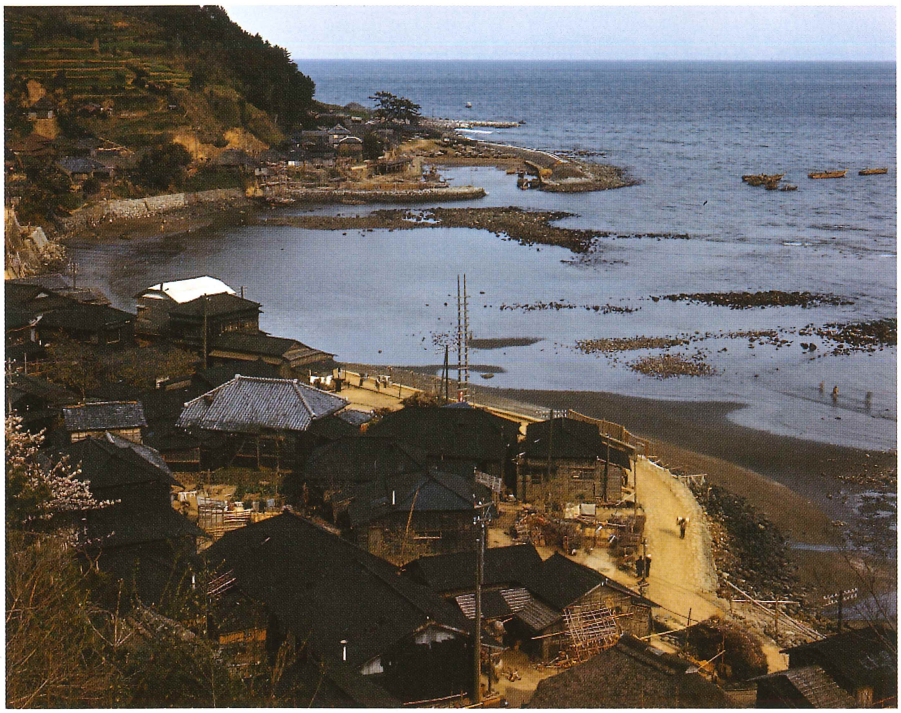


写真2　宇佐美の留田地区
（昭和25年頃ＧＨＱ付カメラマン　ディミトリー・ボーリア撮影　マッカーサー記念館提供）

## 戦前・戦後の宇佐美

現在の宇佐美地区の住民人口は一万人を超え、水田は姿を消しましたが、写真4と6に見るとおり戦前は「宇佐美千石」と呼ばれるほど水田に恵まれました。

水田の他に留田地区の漁業や山間からの薪炭材などの産地でもありましたが、写真3に見るように網代宇佐美間の難所を通る県道（現国道135号）の開通は、この地に大きな変化を生む出来事で、この頃から宇佐美の海岸で海水浴を楽しむのどかな姿が見られるようになりました。

表紙の写真2は、GHQ占領下の昭和二十年代に宇佐美の留田地区を捉えたカラー写真です。詳細に見ると火見櫓の下を歩く女性や砂浜で三角ベースに興じる子どもたちの姿が映っています。この写真を撮影したGHQ付カメラマンのディミトリィ・ボーリアも網代からの道路を通って宇佐美に入っているようですが、物資や人の移動が、船から自動車や汽車に変わったのが昭和初期です。

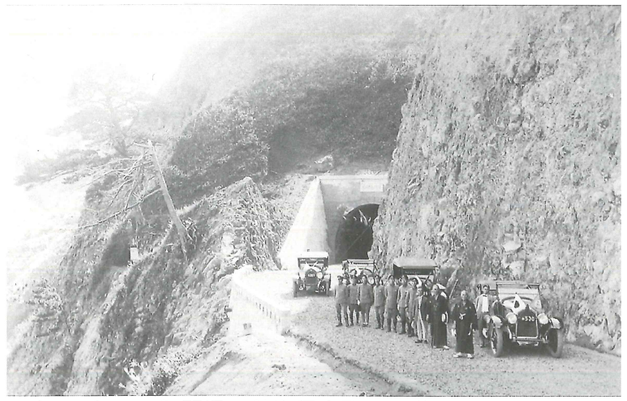


写真3　大正14年開通の熱海伊東間の県道（木下杢太郎記念館蔵）

写真5　宇佐美海岸で海水浴を楽しむ家族（掛川南陽撮影）

写真4　宇佐美山田から初津方向の景観（昭和初年宇佐美村発行絵はがき）

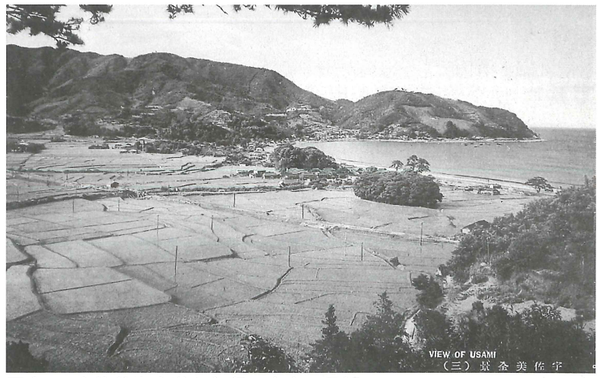



写真6　宇佐美塩木道から留田方向の景観（昭和初年宇佐美村発行絵はがき）

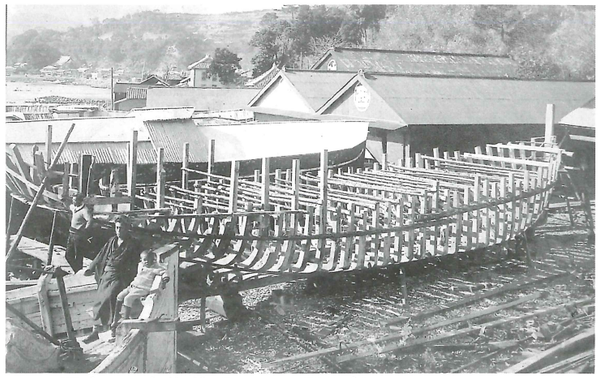


写真7　宇佐美留田の森野造船（森野宗一郎さん蔵）

写真9　震災から急速に復興した松原の海岸通り（昭和9年　絵葉書）

写真8　大正年間の大川橋（絵葉書）

## 観光伊東の姿

大正12年9月1日の正午近くに突然起こった関東大震災では、宇佐美と伊東は津波によって大被害を受けました。写真8は震災被害を受ける前の大川橋ですが、津波はこの橋の上に大きな船を打ち上げてしまうほどの高さと破壊力をもって押し寄せました。写真10には、震災で倒壊した家々の向こう側に大川橋が見えており、橋の欄干に船が乗り上げているのが確認されます。

大正5年には、伊東海岸に陸軍の複葉飛行機が不時着するという珍事が起こります。最新鋭の飛行機に乗る軍人は墜落しても堂々と見えますが、二日後の試運転で再び墜落してしまいます。

昭和十三年には伊東線が開通します。写真12は開通式当日の写真です。当時既に日中戦争が激化しており、物資統制が始まっていましたが、規制を受ける直前に着手された

写真10　関東大震災の被災直後（竹田信一収集写真）

写真12　昭和13年伊東線開通記念の日（絵葉書）

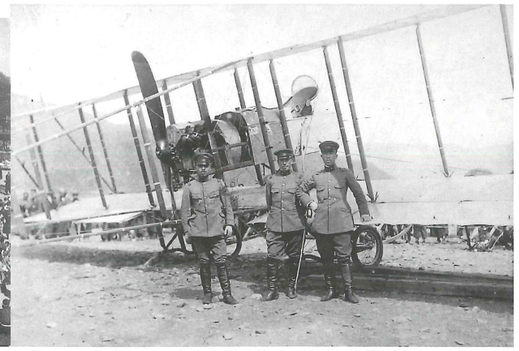


写真11　大正5年に伊東海岸に不時着した陸軍の複葉機（西小学校所蔵写真）

写真13　松川河口の風景（木下杢太郎記念館蔵）

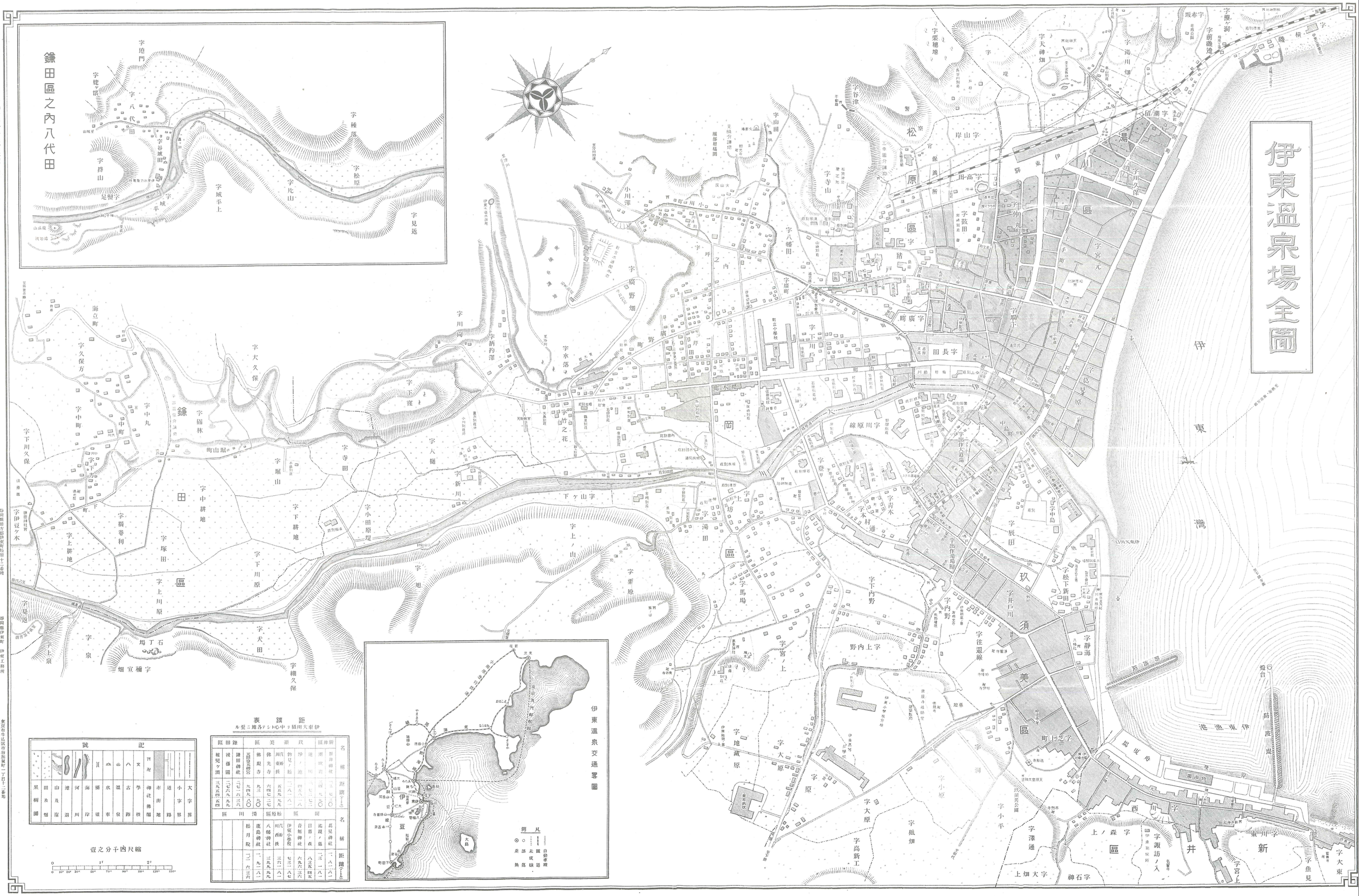



図1 「伊東温泉場全図」（昭和14年版 文泉堂発行）

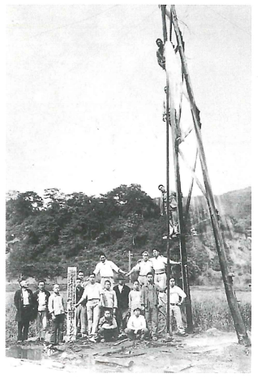


写真14　昭和12年岡地区の温泉掘削作業（山田誠さん所蔵）

伊東駅は、駅舎の設計に統制が加えられず、南国情緒をもつ秀逸な建物を建設することができています。

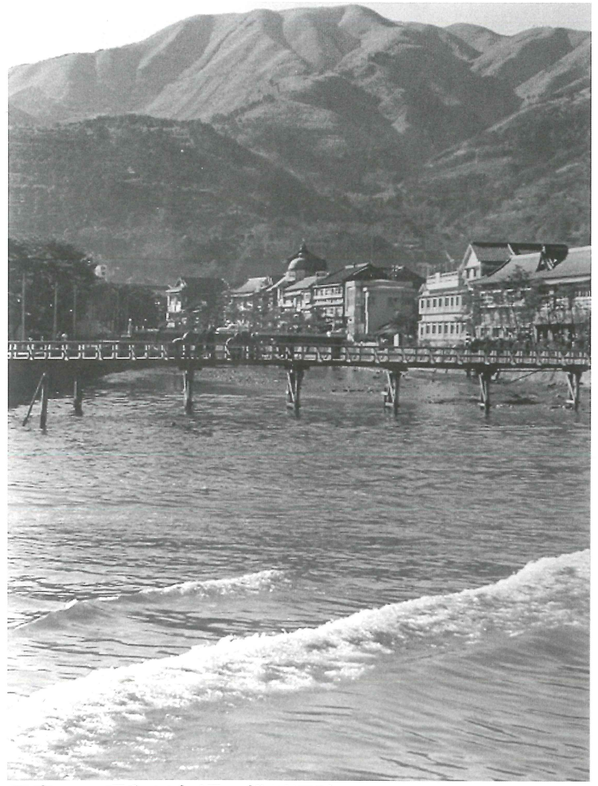


写真15　昭和30年頃の松川河畔（東海自動車所蔵）

戦前の伊東は、高級別荘地として知られており、北里柴三郎、若槻礼次郎、東郷平八郎などの著名人の別荘が構えられました。そうした政治家や高級軍人、学者、実業家など当時の富裕層が伊東に求めたのは、温泉と穏やかな自然環境です。写真13は松川の河口付近ですが、砂州の内側に大きな和船がつながれており、河口港として栄えていた頃の姿を想像させられます。この静かな河口近くに東郷平八郎は別荘を構えましたが、当時の温泉の掘削の様子が写真14に示すようなものです。

伊東線の開通によって、東京から伊東に来る客層が厚くなり、やがて大衆的な観光地へと変化が生じます。昭和10年代には写真15に示すような木造三階建ての建築がずらりとならぶような景観になっています。この写真自体は、昭和30年代に松川の河口付近から上流方向を撮影したもので、戦後のものですが、景観としてはこのような姿が戦前に既に成立していました。

写真16　旅館「伊東館」に疎開した赤松国民学校の児童（土屋善二さん所蔵写真）

別荘地として出発し、やがて温泉旅館の建並ぶ町に発展した伊東ですが、太平洋戦争では多くの旅館が爆撃から逃れて疎開生活をする東京の子供たちを収容する施設とされました。写真16は東京の親元から離れて伊東館に疎開した赤松国民学校の児童と旅館のおかみさんです。撮影日は昭和20年の1月1日ですが、この数ヶ月後には東京は大空襲を受けて焼け野原になってしまいます。

## 漁業の町　伊東

観光伊東の発展とともに伊東は漁業の町でもありました。写真17は、昭和14年に新井の定置網にかかった四万本のブリの大漁の模様です。このような定置網漁や、周辺の港から出漁するカツオ漁などと合





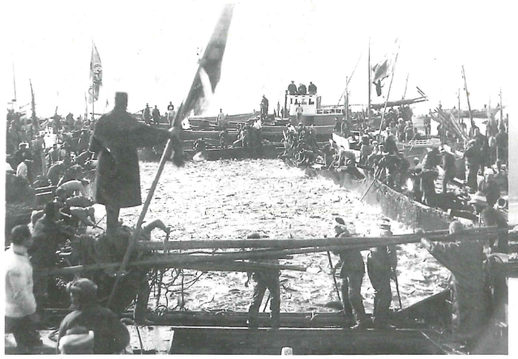


写真17　昭和14年のブリの大漁（土屋善二さん所蔵写真）

写真18　大正末年の新井港（土屋善二さん所蔵写真）

わせて伊東の水揚高は全国屈指の量を誇っていました。

写真18は、新井の防波堤が建設作業中ですから大正末年の新井の漁船の姿を捉えています。新井の防波堤は、大正15年に完成し、以後の漁業発展の基礎となりました。昭和30年代には写真22に示すようにひしめき合うような漁業発展がありました。

写真19の玖須美海岸の干物干しの姿は、昭和15年に撮影されたものです。干物の生産は、江戸時代以前に遡ることができる伝統的なものですが、このように具体的な姿を捉えた映像は非常に少なく貴重です。写真20の巨大なサメは、新井の定置網にかかったもので、この海域の豊かな自然条件を物語るものです。

写真21に示した漁船は新井の勘五郎丸の進水時のものです。船尾には下がり藤の艫旗（写真23）を掲げており、この地の漁師たちの伝統が示されています。残念ながら、これらの漁船は日中戦や太平洋

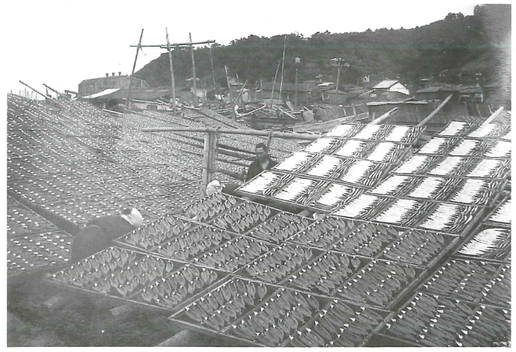


写真19　玖須美の干物製造（土屋善二さん所蔵写真）

写真21　新井の漁船勘五郎丸の進水（斉藤守男さん所蔵写真）

写真22　水揚げ作業でにぎわう昭和30年代の新井港（竹田信一収集写真）

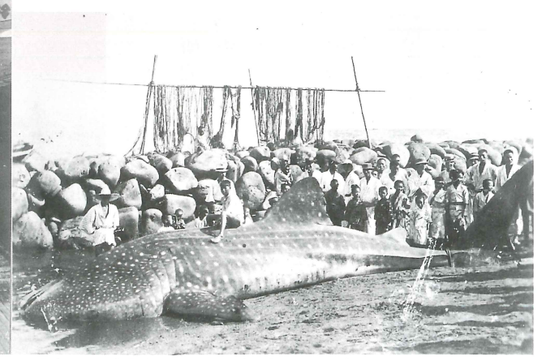


写真20　定置網にかかったジンベエザメ（飯島実さん所蔵写真）

写真24　大漁を祝う漁師たちの祝い着「万祝」

戦争に際して戦地へ徴用され、兵員や物資輸送に従軍して戻らないものがほとんどでした。

写真23　勘五郎丸の艦旗

写真25　昭和初年の川奈（小室村発行絵葉書）

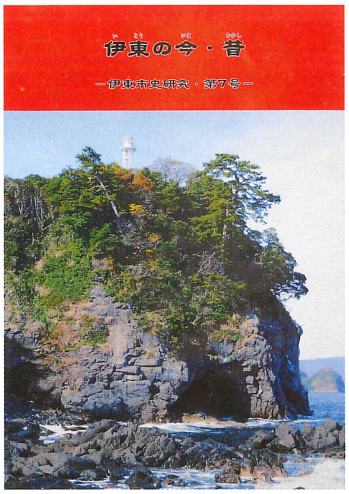
川奈地区は写真25に示したように地形に恵まれた天然の良港だったために江戸時代以前から廻船や漁船が基地とする港町でした。

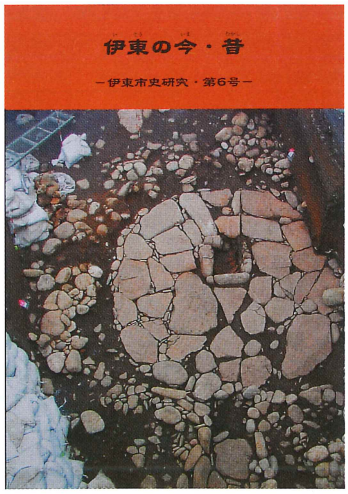
## まとめ

写真資料によって宇佐美や伊東の戦前と戦後の姿をたどってきましたが、伊東市内には他にも富戸・八幡野・赤沢と続く海付の集落と、岡・鎌田・荻・吉田・十足・池などの山付の集落があります。こうした地区にも、さまざまな戦前・戦後の暮らしがあり、写真資料が語る重要な歴史があります。今回紹介できた写真はごく一部です。市史編さん室では古い写真も市民の歩んだ歴史を語る重要な資料であると考えて大切に保管しています。皆様からの様々な情報の提供をお願いします。

## 市史編さん室から

市史編さん事業の成果をまとめた雑誌『伊東の今・昔-伊東市史研究-』6・7号を好評頒布中です。各千円　書籍商組合加盟書店でご注文ください。市外の方は送付先等を左記へ電話でお申し込みください。




編集発行　伊東市教育委員会
生涯学習課　市史編さん担当
〒414-8555 伊東市大原二丁目一番一号
☎〇五五七—三二—一九六二